



林氏雜纂
上

15
1687
1



門 1. 5
號 1687
卷 1

官 許

多氣志樓主人著

林氏雜纂

全二冊

東京

甘泉堂
千鍾房
合刻

林氏雜纂叙

陸前國林子平先天少後憲有外
患著海國兵談當時海晏河靖
朝野恬熙不以外事為意賢閣老
以白河少將猶以為妄言証世者况
使吏庸人聞其說未有不掩身而却

了居 1754



49-2671

走者子平沒未幾有鄂羅斯之
愛其所言此龜卜數計天下始非
臣識見之明豈可不謂豪傑之
士哉東京松浦子重夙業其為
人厚其遺言遂行成二書名曰林
氏雜纂邦寄徵軍序夫兵法之要

在於知己知彼惟知己而不知彼則身
目固於一隅懵昧固陋胡足以言之天下
之大計子平有見於此北極俄夷西
耳列長崎以詳悉海外之情狀為
先務然在子平之時諸港尚鎖故
其論以防戢為主今則子平以為可

實可憂者莫如暹羅巴諸國 我其
之通和親結條約仿造其器械則
有銃礮有鐵道有火輪船有傳信
機講究其學則有開成學延洋師
遣留學生汝亦之事情日明而天以
之目目日開彼使乎平而有知視以

寫河如夫和之破必歸戰之極
必歸和之之其戰未始不相由也至
國之才可戰而後和之久而不渝不能
則名和而實屬隸其勢必至於陵
侮之將制之治削攘奪之而和
亦遂不可得也然則兵備之不可不

張惡有和與戰之別哉嗟予予當
天少身目未開之際猶能先為禱無
備乞我可觀則俾其出於今日耶吾
必知周流天下歷察各國戎政之
得失和游而愛通之泰互而酌量
之為

皇國之萬世適宜之法其揣摩
精確更有不倍於兵談者焉而墓
木既拱矣無由起之九原嗚呼彼兩
余竊為天下痛惜之余承五帝業知
縣系於陸前國之先哲有子平其
人表章其事迹以獎厲後進因吾

職也而兵亂之餘仍以飢饉初務
鞅掌未暇及幸有子重是以蒙恕不
詳以多事援筆數卷首云

明治庚午仲秋就鸞津宣光撰於書于

登米縣安遇齋

神八并耳
命苗裔

縣連
宣光



松浦子重為政術敏
吏悉認安其地亦大
丁著心之積至二百餘
卷得心於此集益三
十年矣考遭

王政之新之運者惟
 夷闕拓之舉則子產
 三九年一之階心大
 為國家之用人皆成
 子重之駕志且後見

之字者之來自却榮
 子平之為人後之善
 初其世族之揚名且
 赤親善故借之平之
 讀須若林氏發德為更

有完之以謂慷慨有志之
 士誰能少若乎乎亦而如
 子重自極強海家係
 之地以の國家有用之
 業其深而平之德與子

平同之志真也乎之亦之
 志也如之乎之乎重回其
 志也亦若之乎之知也也
 乎也之乎之乎之乎之
 益多之乎之乎之乎之

西法三ノ年庚午菊
秋山中賦撰再書於
東海之修天行腐



東久世開拓長官詠

留遊三ノ年瑞ぬまき
也、之、東、安、於、之、之、之、
之、之、ま、き、あ、け、靴
君、を、也、通、社、福

海之揚波二百年無人
 開口到防邊一德熱
 血忠埋地唯五如系
 一難老泉 水今防海

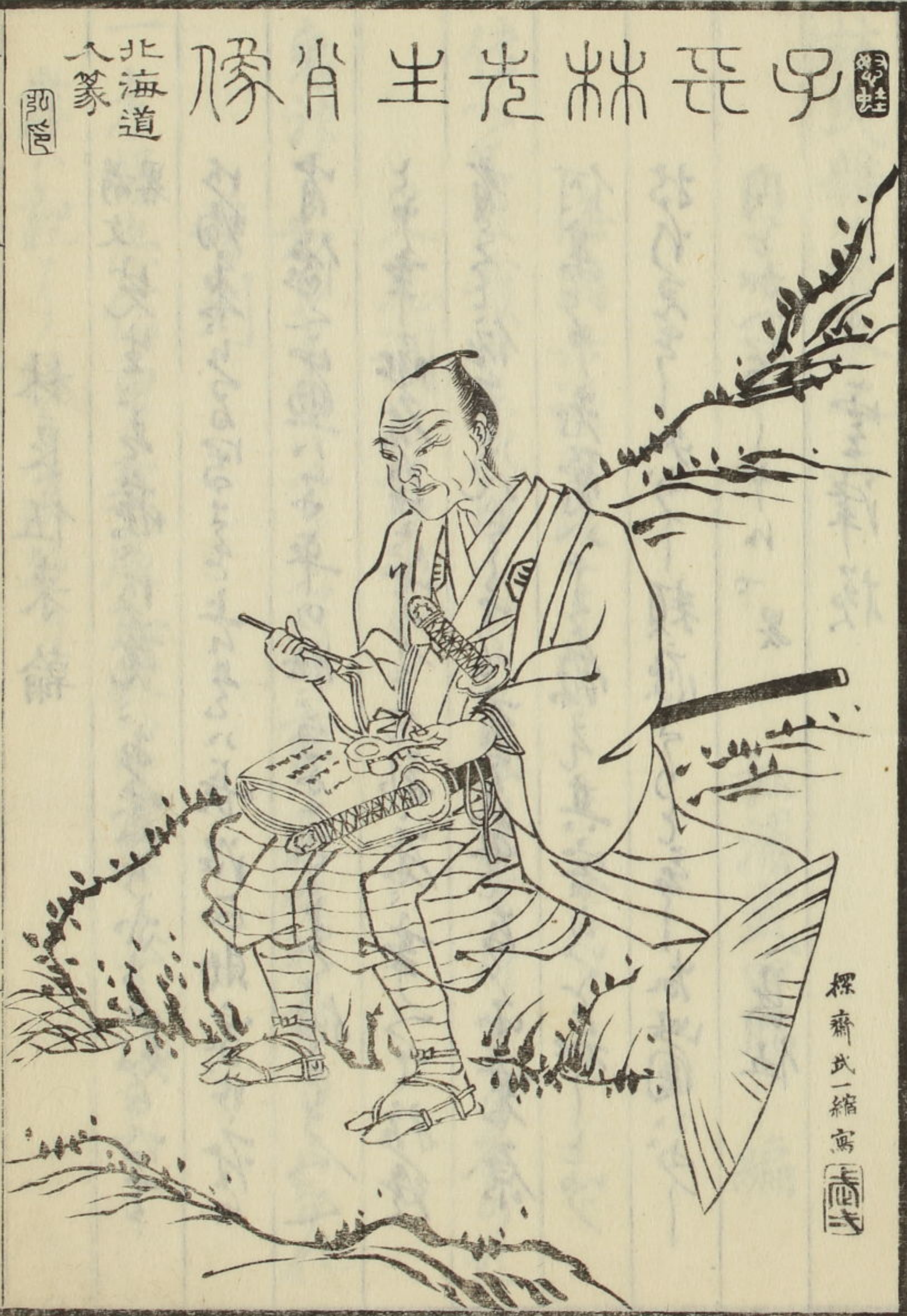
快狗 至竟橋果等
 神果信如我如等
 童孫只言緒新人

竹堂齋題



漫遊中所齋雅帖所有寫

海玉岳波のうきと
 舟のうきもよせは
 先のうき
 さみしき
 世のうき
 林道良阿
 齋書



標齋武一縮寫

子 丑 林 生 肖 豚
 北海道
 八 篆

親に對して不敬不作法は之を棄るる不敬不作法は孔可業
 多し其身此行作直にして親の心を安堵せしむ事なり
 一悌は兄弟の義に兼て長を尊ぶ道にして且長者は順ふ事なり
 兄弟は不及已より年長増すたる人故に兄弟は不敬して能く不
 敬云順と行位坐臥飲食おむと礼讓を不忘して順
 道を守り事之又年減する人と弟同位なり事なり
 一忠は君に侍る事にして且朋友は交る事偽るる信義を
 以てし事なり

己を盡すは忠といふ君に事して死すも己を盡すは
 朋友は位あるも己を盡すはなり故に士は己を知りて

為小死すといふなり故に忠なり

一信は毎事に忠實を盡す事なり安事故に信を以て事なり
 上天子より下庶人まで信あり人信しは多ければ人
 肖く貴賤を多くに信故に貴ありするなり
 一勇は義に相争ふ事なり勝る事なり
 文武は諸義を以て心術を以て勝る事にあつてこれの上達成就
 遅き之勝る事ハ万能の上事なりと知るなり
 一義は勇に相争ふ事なり裁断に心なり
 道理不仁を以て決断して形骸を以て死する事なり死を以て死
 場を以て死し討つ事場を以て討事なり

一 塵にかた有るに、あは立派なる事也

毎物にたたく奇奏ふに、くむも、好美の捨つて成見て
そく取き、たを不取之恥におおなり

一 耻の辱を知る事、前勝の致さる事たる也

毎まよ比、無未練るる、前業、たは、て、く、笑われま
穉りと、眩病るる、前業、あ、て、他、日、さ、け、ま、れ、る、あ、と
心、致、は、く、抄、年、の、塵、れ、お、中、に

右八徳、人、に、土、産、なり

一 讀書を怠る事、るれ

讀書の、萬、能、に、基、る、り

卯の時、起て、高聲、も、讀書、す、也

辰の時、より、巳の時、ま、り、字、を、お、ふ、一

晝の間、下、小、記、す、と、く、或、能、と、習、ふ、一、又、農、工、商、の、卯、の、時

より、其、抄、前、此、業、致、致、を、一、休、の、遊、歴、と、習、ふ、事、と、林、と

夜、の、法、軍、該、及、ひ、法、記、録、亦、年、齡、隨、ひ、或、は、三、五、枚、或

十、枚、或、十、枚、乃、至、百、枚、に、讀、つ、事、也

一 武蔵、小、精、出、す、一

巳の時、より、酉、の、時、と、夜、道、と、習、ふ、一、就、中、刀、槍、弓、馬、儀

先、と、保、學、問、七、氣、武、蔵、十、七、氣、の、心、致、る、一

一 良、智、能、認、記、し、心、學、と、磨、く、一

一人之善惡邪正附之可否如何と願わば善は善と惡は惡と
 明子辨之知心あるは是良智之此良智は不學して大然
 百人の胸中に存在するを以て所謂神明之萬事此
 良智に問て取計一此良智はまに生るるを克己復
 礼此修行を強て勤一克己は勇之顔子は是故仕
 終せらるる其次は是と勤む一
 一克己復礼此二言能辨一勤む一
 一克己は己之勝と之事之己とい人徳此私をく手取勝は
 一と皆己有り此己は抑除る克己は
 復礼は徳に勝て道義に叶ふ程を以て事之事物皆

礼不礼有て願一或は妄に怒を發する時と何故か斯
 怒を發するやと願はえより私に我儘より起るは
 一度願て息消去する之是氣等の重大な勇と用を
 一榮は湯拵樂此は當朝に大禮之然るは隱者乃難
 事教役の音るは福一園に不心得は夫は覺悟して
 附閑暇此時詩文或は琴棋畫此は雜藝を習し
 空一と口と送ることあり
 右八徳讀書武藝良智克己復礼榮の湯拵樂の八條
 は皆身よ進ませたるは今日此業を修るは遠大の業に
 あらざるは是故勤に馬は才徳を惜と云り才徳は

一寸此陳と云事之又古人業を勤むる君子は外に富に
起ると云六ヶ月の教二十日といふ學は是より故一月は
四十五日より割合之は勇れ持前之聖人の心法は佛
氏も亦家も武藝者の事位も勇にあははまは行の邊
れぬ之をて心法は勇故也——進む事故もも勤む——
文武之二藝は皆此心法と云事と云之是學者の大趣也

附録三章

- 一物と教ハ志を失ふ
- 己の事は好む事の一途小之流は必也——
- 一金教の經濟ハ人々能了知を——

大小此福小應——家道は約——他の力は不強て
朝言と前——蓄積と云也——

一飲食男女ハ人の大慾存之不可不慎也
酒食を婦女は大丈夫の度を失て身を損——或は
義理を欠恥辱を取不和を生——等——終に國家
破るも亦人々能謹慎む——

右

教訓いろは歌

いとける多人もよき事いふは教五川の常此道志くそと
ろるるよ事さといやれた心まうし年たに増る人を教へ

はふんまの志のふ長く胸下まてゆくつ又武此書位乃本
 にんおおの牙此上ほしきよをれし阿 之集抄記
 ほのく乃礼義長るれ朝夕に心やましと語る中のみ
 つつこころ人たうあまふ神よま多已破さるにすは礼
 ぶあまに人のあまきといひりいしれ語るれあう信福
 ち母乃思は頂山初日は海言き海言のかまらまけれハ
 利地を多はいさ此沙法取のそて理の当然と明しせよ
 ぬきんて我志るる下にまのり礼人此智恵をまよふあり
 るん教を多れきせものゆを好まよ何う降ぬ者持 然に
 とのれよくしはなまよまれよ人乃何 幾ハわのあ 引引り

わきれ此果ハ口論喧嘩多きり 教れらよしほやま多きよ記
 かりくは五つの五れまうの 能る能まうてて親よつこのよ
 よみ書いまり一此書其次にカク 務よら馬とく 終
 たりるめよら一八身妙にのれ 二ハ貧より其の年ハ何れ
 礼いまそその種 此多別ありまぬる礼るははに志や
 るたうの 能れハ其方此あられハ親也祖父の年何くは能
 つしとあまをたハ胸あまう 其れ種よあらり下くこの能
 ねん力は定ると通ま習ひおら 勇ま筆ゆらむ心たはれ
 たり中筆よこのめしは乃不精出せ月只るれとふまよと
 らく教好くよ書此書いまぬハ君ハ此石也親の石者ら

むしを腹にまけつゝのまをわくのわく又三種の毒のまを
 うつとまをさるゝ人此をさるゝにたはれぬと人申すも
 ゐるうゝふも唐也大和のあやとまをう飲ふは作はれ
 のちまを唐也大和のあやとまをう飲ふは作はれ
 たり也り也の毒を管さるゝのまをうゝは智と義理の周
 るゝとより唐書精書をさるゝ此はまのゝあは業ははら
 やすゝつに物をあつゝるゝ物無理屋の師 貴を業つゝれ
 まゝとたふ教日向をうゝつせれたはけ何とゝ一天地の神
 けやゝいひあまといひつゝまれのあやとゝ一後悔を悔
 されぬ石礼とまゝぬ人たゝゝゝは人上胸は高生

る海とばつゝをさるゝ人此をさるゝにたはれぬと人申すも
 ゐるうゝふも唐也大和のあやとまをう飲ふは作はれ
 のちまを唐也大和のあやとまをう飲ふは作はれ
 たり也り也の毒を管さるゝのまをうゝは智と義理の周
 るゝとより唐書精書をさるゝ此はまのゝあは業ははら
 やすゝつに物をあつゝるゝ物無理屋の師 貴を業つゝれ
 まゝとたふ教日向をうゝつせれたはけ何とゝ一天地の神
 けやゝいひあまといひつゝまれのあやとゝ一後悔を悔
 されぬ石礼とまゝぬ人たゝゝゝは人上胸は高生

もろく此文のよまを口にするの記録をんたん終るんじ
せひ張とく希くあつとやうと切放れたる人う物多
すまふのこほくまひむ心さうと失ふた神をさし
右持くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

和蘭船ノ圖ノ上ニ刻スル文

阿蘭陀一名ハ和蘭又紅毛ト稱ス則業謁埤爾蘭德亞
ノ中ノ一州ニソレ。子エテランダヤハ世界ノ西北邊歐羅巴分
野ノ國ニ其地七州十七都會アリ。ランダモ其中ノ一州ニ本邦
モ惣名ハ日本ニテ其中ニ四國九州杯ト分ルカ如シ。ランダハ北極
ノ出地五十度ヨリ五十三度ニ至ル甚寒地ニ其人物ニ五ツノ異

相アリ長鼻緑眼紅毛白色長高也文字ヲレツテルト云其
筆法横ニ書ス日本唐山等ノ人ニ不讀。其服ハブルツクトテ日
本ノ股引ノ如キ物ヲ着シ衣ハ。ロツコトテ襦半ノ如キ物ヲ服ス
官アル者ハ。マントルトテ丸合羽ノ如キ物ヲ礼服トス其食物ハ。
ブロードトテ小麦粉ヲ餅ニ造テ炙食フ世ニハント云モノ是之
其外鳥獸膏粱ノ物ヲ好。又生蘿蔔ヲ多食ス其國日本ヲ去
一日本道一萬三千里ニ其中日本ヨリ呱哇へ三千里呱哇
ヨリ。ランダエ一萬三千里ニ扱毎年日本エ来ル。ランダ人ハ
本國ヨリ来ルニハ非ス皆呱哇ヨリ来レリ呱哇ハ。ランダヨリ
押領シタル國ニテ出張ノ城アル所ヲ。バターヒヤト云日本ノ紅毛

館ヲ出島ト云カ如シ吼哇ハ日本ノ正南ニ當レリ此故ニ五月
入^ツ徽ノ節南風ヲ得テ日本へ来船シ九月北風ヲ待テ帆
是ヲ定式トス扱ヲラシタ人船ヲ呼テ。シキツフト云其船ノ制
甚壯大ニマツ大材ヲ用テ船ノ骨組ヲ作り粟ノ角材ヲ以テ
縦横ニ打合セ空隙ノ処ハ漆或ハ。キヤシラ込又外面水ニ入処
ハ悉ク鉛ヲ以テ包ム船ノ大サ横三丈余長十五丈深サ三丈
八尺船ノ内ハ惣三階ニ階毎ニ九尺帆柱都テ四本アリ中央
ノ大柱高キ一十九丈ニ都テ帆ノ數十七幟ノ數十二四面ニ
大砲三十余ロヲ設ク炮毎ニ三貫目ノ玉ヲ入ベシ扱其船ニ
乗来ル人凡百余人ニ其中甲^カ比^タ丹。ヘトル。シケツフル。フナ

フマン。ステユルマン。等ト云ハ役名ニテ上役ノヲランダ人ニ其
余ノ下人ヲ。マタロスト云甚賤キ風俗ニ又下人ノ中一種。ス
ワトルヨンコト云モノアリ世ニ黒ホウト云モノ是ニ是ハ本
國ノ人ニハ非ズ。ジヤガタラ。ブウキス。ボウトン。テ一モル等
云南海ノ島ニノ下人ヲ。ヲランダ人買取テ名々ノ使ヒ者ト
スルニ皆熱國ナル故其人甚黒色ニ又船毎ニ名アリ或ハ。
ゼートイン或ハスタアベニス或ハホイストスヘーキ等ト云ニ
日本ニテ何丸ト名ツクルカ如シ扱其船ニ載来ルモノ砂糖
蘇^ス木^ハ藤^ト羅^ウ紗^ラ天^シ鷲^ヤ織^ビ奥^ロ嶋^ト海^シ氣^トノ類^ト木^ノ香^ノ阿^ノ仙^ノ藥^ノ丁^ノ子^ノ
山^ノ飯^ノ来^ノ胡^ノ椒^ノ又^ノ硝^ノ子^ノ器^ノ目^ノ鏡^ノ其^ノ外^ノ珍^ノ器^ノ奇^ノ鳥^ノ獸^ノ又^ノ其^ノ食

料ニ牛豕雞鶩ノ類各數百千ヲ載ス亦日本ヨリ積取ル物銅
百萬斤ヲ定式トシテ其外傘磁器漆器銅罐銅錢小間物類
織物類又食物ニ境酒芥子粕漬ノ大根諸菓ノ漬物又
各數百千ヲ積其船凡千万斤ヲ受其國開闢ヨリ今年
迄五千四百二年ニナル阿蘭陀ト云号ヲ立レ國主ヨリ今年迄
千七百七十六年ノ國主紘脉變革ナレ寛永十七年商賣
免許アリシヨリ今年迄百四十三年綿ニ不絶緝也天明
二年記

此圖崎陽ニテ一見一聞ノマ、ヲ其地ニテ刻セシモノカ傍ニ
仙拾林子平戲述書長崎富嶋傳吉梓刻ノ篆字朱

印有ルナリ

跋六無山人著書後

鎖國之計似美。而其弊終至自鎖我人。鎖我學。又
併我才。與知而鎖之。是可歎已。試把百年前說海
外事情者。觀之不涉於荒唐。則必失於乖繆。特達
若林子平。猶且不免其陋也。然子平居河清海安
之日。豫虞險波毒浪於身後。喋喋辨說。著書萬言。
至使開明今日之憂國者。不得不推尊其卓見。曠
識。所謂隻眼如箕者。非耶。兒貞留學于法蘭西。今
茲夏五。寄彼國新刊書數部於其友川勝大海。內

有王代一覽三國通覽圖說二書顧彼學士羅尼輩所譯也嗚呼彼亦知所原哉庚午仲秋鮑庵逸民粟本鯤識

坪碑考

坪或作壺。俗作壺者誤也。○坪蒲明切音平地平處。○壺苦本切音悃。宮中街亦爾雅。宮中街郭璞曰街閣間道也。亦詩大雅其類維何室家之壺。

○此碑也在陸奧州宮城郡多賀城址。陸奧國宮城郡風土記云坪碑在鴻之池為故鎮守府門碑。惠美

朝猶立之。見雲真人清書也。記異域本邦之行程。令旅人不為迷途也。

○此碑作坪碑亦作壺碑。共是可謂道路之碑之義也。雖然稱壺碑者不知始于何人也。唯因風土記為坪碑者可為是也。而因為鎮府門碑之文則建于碑於城門外面大道令人知四方之行程者也。

○此碑記五方之行程謂去蝦夷國界一百廿里也。右謂一百廿里者准于今法廿里。六尺為一步六十步

丁為一里今乃以三十六丁為一里也故謂古之一百廿里者乃准于今之廿里也則知挑生郡以北盡没于夷地也。其挑生郡者在陸奧州中央

以南之地也考之國史往昔夷人侵凌陸奧北邊而
 動乃入寇奧南野總之諸州也故東征之役無已者
 千有余年矣而桓武帝延曆中征東將軍坂上大宿
 禰田村磨驅夷人而悉收陸奧開地者九百里自挑生郡
 至于南部大間濱其行程乃今法之一百七十里也
 因海為塞則陸
 奧無征戍之事者六百余年也可謂實是征東將軍
 之大功也其後

後花園帝嘉吉三年武田太郎源信廣越海而入于
 松前遂得地者七百里自大間濱隔一條汐水而以
 南界東北行今法之一百里計乃古之蝦夷國界也
 自是子孫世世

據守其地迄于今也松前地方雖絕海乎猶隸陸奧
 也因是觀之方今宮城郡鎮府古城者去蝦夷國界
 為一千六百廿里也田村磨之所開九百里源信廣
 廿里則為一千六百廿里也今世讀碑者因其碑文而不知有蝦
 夷國界之道法古今近遠之差也故此記爾觀者詳
 焉仙臺林子平述

致坪碑在陸奧州之多賀城相傳惠美朝獨立之
 迄今年已千計揆立碑之意不過使四方行程者
 適所從來余本華人安能詳述今仙臺林子持碑
 見示觀其筆法道勁專倣古人而若論其精粗則

林氏雜纂卷之一
吾豈敢雖然絕海東方唯見有此書耳且至於道
里之遠近山川之志異恐非余所能參稽者是為
跋

大清乾隆四十三年歲次戊戌重陽後三日書於
崎陽客館吳超後學程赤城

林氏雜纂卷之上

雲霧亦少人

了翁佐藤真道

藏書

樂天堂

佐藤了齋
藏書